

2024(R06)年度 宗谷総合振興局管内におけるケガニ密度調査結果(速報)

道総研 水産研究本部
稚内水産試験場 道総研



※本報告は宗谷総合振興局管内のみの速報です。オホーツク海全体の報告は、オホーツク総合振興局管内を含め、全調査終了後となります。

- ・ 宗谷総合振興局管内全体で甲長7cm以上の雄ガニ（来年度の漁獲対象資源）の資源量指数は昨年より微減しました。海域別には北部海域（浜鬼志別～目梨泊沖）、南部海域（枝幸～風烈布沖）の両海域ともに微減しました。
- ・ 甲長7cm未満の雄ガニ（再来年以降に漁獲に加入する資源）の資源量指数は昨年より減少し、依然として非常に低水準が続いています。

1. 調査の概要

2024年度の宗谷総合振興局管内の密度調査は、4月16日～4月25日の期間に7隻の調査船により実施しました。調査は全46定点（北部25点、南部21点）において、1定点につき調査かご（2寸目）50個を設置してケガニを採集し、定点毎に漁獲尾数の計数、甲殻硬度の判定と甲長の測定を行いました。

2. 資源量指数とは？

オホーツク海域のケガニでは資源量を直接推定できないため、資源量指数を用いて資源状態を把握しています。資源量指数は、毎年同じ条件で行った調査データを解析することによって得られ、これを経年的に比較することにより資源の水準や動向を相対的に把握することができます。算出された資源量指数の値は、資源量とは比例関係、すなわち資源量指数が多いと資源量も多い、反対に資源量指数が少なければ資源量も少ないといった関係にありますが、資源量指数＝資源量ではありません。

当海域におけるケガニの資源量指数は、①毎年、同時期に同一地点（定点）で密度調査を実施し、各定点の漁獲尾数と重量を把握する、②各定点の漁獲尾数と重量を調査面積で重み付けする、③各定点の値を合計して海域全体の資源量指数を得る、といった方法で算出されます。

※これ以降の文中表記で、「年」は密度調査年、「年度」は漁期年度です。
 ※丸め誤差により合計値が一致しない場合があります。

3. 甲長7cm以上の雄（来年の漁獲対象資源）の資源量指数

2025年度漁期に漁獲対象となる甲長7cm以上雄の資源量指数は7,546であり、昨年の7,987より微減しました（図1）。このうち、2025年度に新たに漁獲対象となる加入群（甲長7cm台雄）の資源量指数は38であり、昨年の69より更に減少しました。

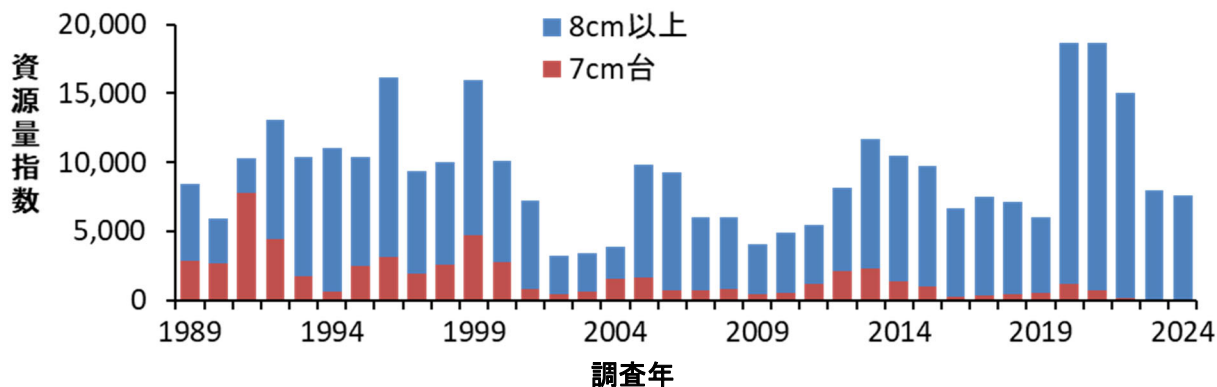


図1 資源密度調査における甲長7cm以上の雄ケガニの資源量指数

4. 甲長7cm未満の雄（再来年以降に漁獲に加入する資源）の資源量指数

2026年度以降に漁獲対象となる甲長7cm未満雄の資源量指数は1と昨年の7より減少し、どの地点でもほぼ採捕がない結果となりました（図2（図4右も参照））。

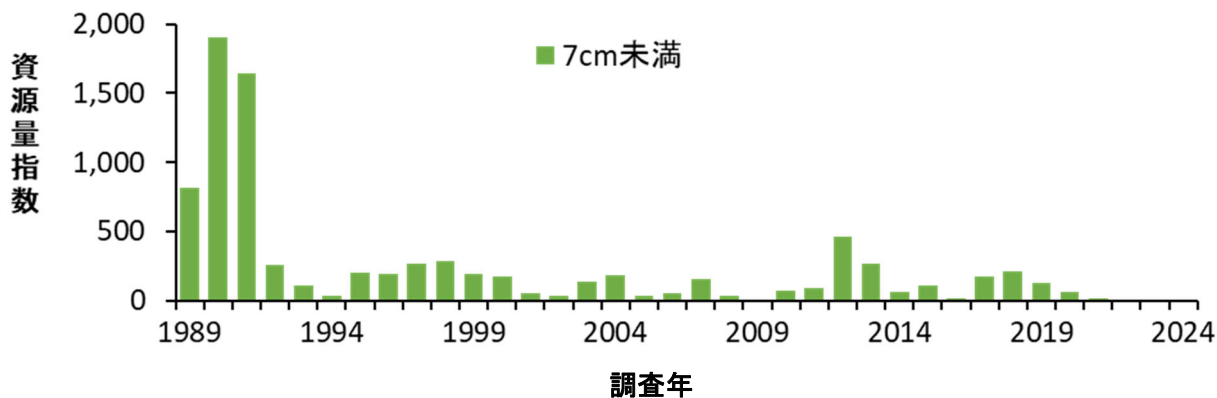


図2 資源密度調査における甲長7cm未満の雄ケガニの資源量指数

5. 雄の海域別資源量指数

(1) 北部海域（浜鬼志別～目梨泊沖）

甲長7cm以上の資源量指数は6,051であり、昨年(2023)の6,409より微減しました（図3上）。甲長7cm未満の資源量指数は0.4であり、昨年(2023)の5より減少しました。

(2) 南部海域（枝幸～風烈布沖）

甲長7cm以上の資源量指数は1,495であり、昨年(2023)の1,578より微減しました（図3下）。甲長7cm未満の資源量指数は1であり、昨年(2023)の1と同じでした。

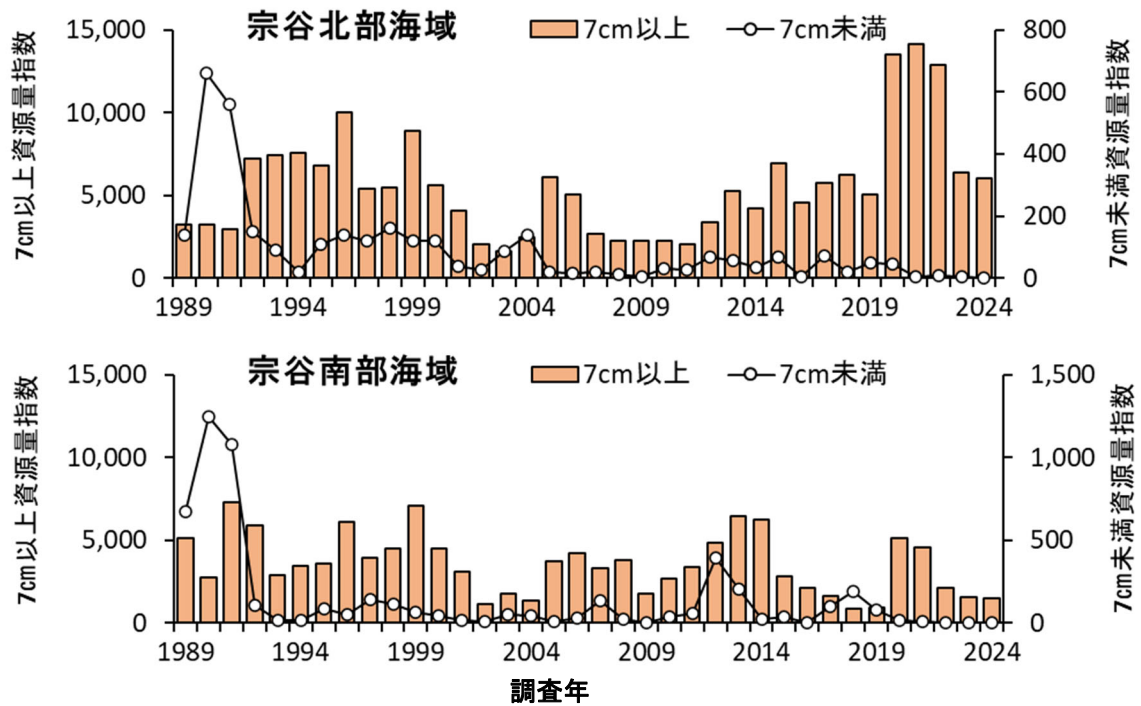


図3 資源密度調査における海域別資源量指数

6. 雄の定点別漁獲尾数

100かご当たりの漁獲尾数を見ると、甲長7cm以上では浜鬼志別～山軽のラインで多い傾向が見られました。枝幸～風烈布ラインではそれに比べると少ない分布でしたが、近年採捕が非常に少なかった風烈布ラインでもやや増加しました（図4左）。

甲長7cm未満は漁獲のない調査点がほとんどであり、非常に少ない結果となりました（図4右）。

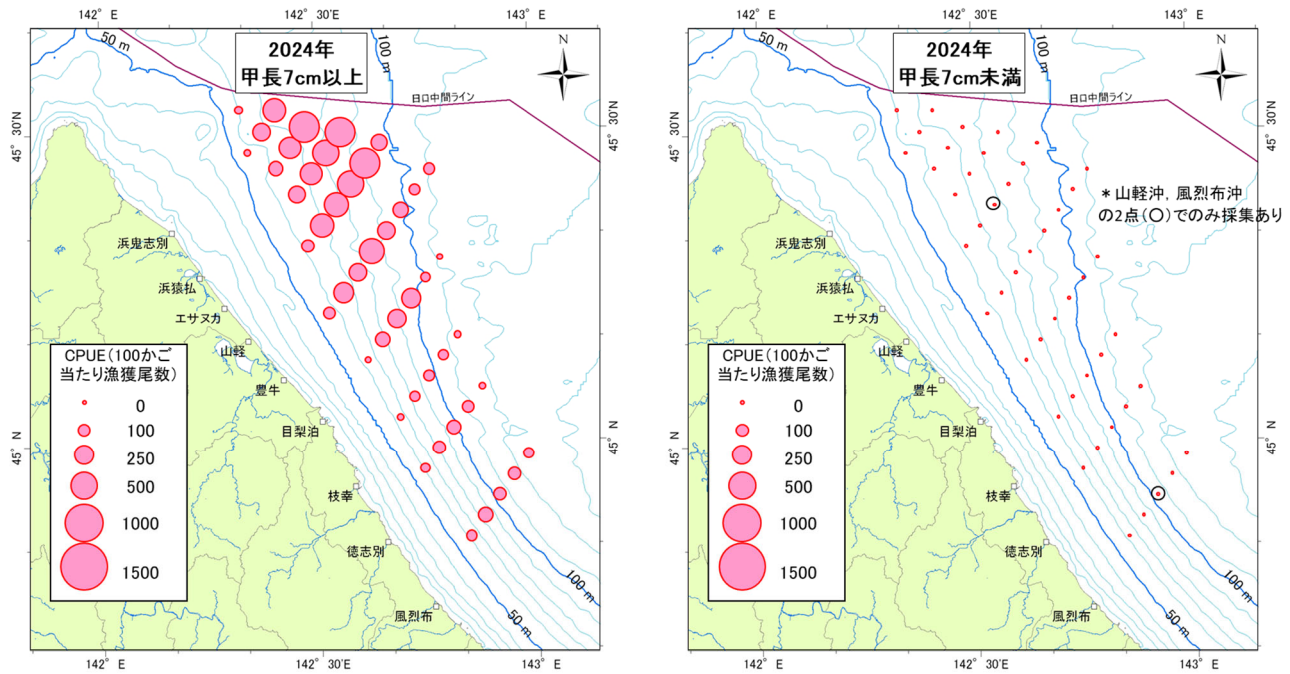


図4 2024年資源密度調査における100かご当たり漁獲尾数分布
丸の大きさは漁獲尾数に比例